（別記５－１）

活動の成果概要

令和４年度　土佐清水ジオパーク活動支援事業

【事業対象者】 目良裕昭

【所属】高知県の学校資料を考える会

活動の名称　土佐清水市旧大津小学校資料から地域の文化資源を探る

【活動の成果概要】土佐清水市旧大津小学校資料に残された自然災害記録調査

教員が見た近代の災害の記憶と教訓－大津小学校日誌の分析から－

１、大津小資料について

高知県土佐清水市大津は、幡多郡大月町小才角に隣接する海辺集落である（図１）。2020年、集落中心部にある旧大津小学校校舎に明治～昭和期に使われた資料類が多く残存していることが判明し[1)]、2020年度、市民団体「高知県の学校資料を考える会」と土佐清水市教育委員会などによって校舎からの救済・調査が行われた[2)]。明治～昭和期の約４千点に及ぶ「大津小学校資料」（以下大津小資料）は、学校に所在する資料「学校資料」の全体像が分かる全国的にも稀有な資料群であると位置付けられている（楠瀬ほか2021）。学校資料は近年、教育史や歴史学、考古学などの学界で注目を集める歴史資料で、少しずつ研究の蓄積が進んでいる（地方史研究協議会編2019）。

大津小資料は大津小学校（以下大津小）で作成・使用された公文書、図書、教材類などを含む約4200点の資料群である。大津小は明治８年（1875）２月大津尋常小学校として創立され、昭和16年（1941）に大津国民学校、昭和22年（1947）に大津小学校となる。校舎は明治27年（1894）、昭和28年（1953）、昭和37年（1962）に改築、昭和24年（1949）には給食場が完成し学校給食が始まっている。昭和40年代には、複式総合研究や作文教育研究、理科教育研究で土佐清水市の指定校となったほか、昭和43年（1968）には市内体操発表会において最優秀校となるなど運動も盛んな学校だった。児童数は明治30年(1897)に73人、明治42年（1909）には103人と３桁となり、以後100人前後で推移。昭和23年（1948）の123人をピークに以後減少し昭和40年（1965）に47人、昭和46年（1971）に20人、

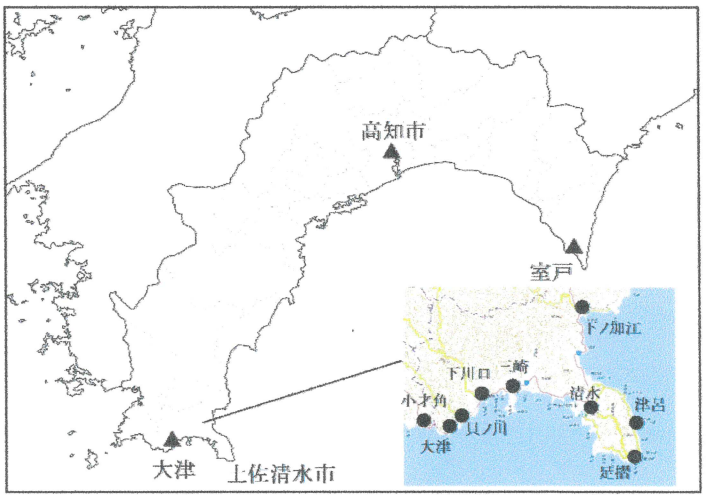


図１　大津の位置と関連地名

休校した平成4年度（1992）は3人だった。平成5年3月に休校、平成16年（2004）に廃校となり、校舎は以後未使用のまま集落に残っている（楠瀬ほか2021、高知県の学校資料を考える会編2021）。

写真1　休校前の大津小学校（1989年）

校舎から救済し土佐清水市内の旧中浜小学校に運ばれた資料の整理過程では、約2千点の図書・教科書類をのぞいて、学校日誌90冊（明治25年度～昭和62年度分）と、文書類とモノ資料の計2113点の資料目録が作成されている。目録作成によって資料群の全体像が明らかにされ（楠瀬ほか2021）、公民館での展示での地域への周知を経て、資料を所管する教育委員会の許可を得て公開・研究の体制が整った資料群である。

本研究では、まず漁村・大津集落の沿革を歴史文献から整理し、現代までの災害との関係性についても明らかにする。続いて、校長ら教職員が記載した学校の公式記録ともいえる大津小の「学校日誌」90冊から、特筆すべき災害の記述を抜き出し、「教員が見た近代の災害の記憶と教訓」という視点で分析を行い、土佐清水市の災害史における学校日誌の資料価値を考えたい。

2、漁村・大津の沿革

まず、大津集落の沿革を既存の歴史資料や文献から整理し、漁村・大津の歴史的変遷と全体像を大きく戦国末期、江戸期、明治・大正・昭和期の3期に分けて明らかにする[3)]。戦国末期の大津集落についてはほとんど明らかにされていないことから、景観史の視点から新たな視点を提示した。

（1）戦国末期の大津―耕地の少ない海辺集落―

集落としての大津が文献で確認できるのは、天正18年（1590）に行われた太閤検地の土地台帳『長宗我部地検帳』（以下『地検帳』）の「以南大津村地検帳」である。「ヤケヤサキ」から始まり「■セカ渕」（■は虫喰）までの田地3町2反21代1分、畑地6反46代、屋敷地4反16代、焼畑1筆4代が検地された。

図2　大津の河川と集落

『地検帳』から戦国末期の村落景観の復元をしてみると（図2）、「東クシ西ノ谷」と「大津ヲ■谷（大谷か？）」（粟津川、大津川とも）、「脇ノ川」の谷川沿いの3つの小集落で構成されていたとみられ、屋敷はそれぞれ1戸、5戸、1戸が確認できる。5戸がある「大津本村」には、村を治める名本の屋敷「名本ヤシキ」のほか、寺院「安東寺」、神社「天神」も確認でき、中心集落として要素を備えている。耕地を見ていくと、山地が多く田

畑とも多いとは言えない。田は3つの谷から利水した谷水田である。「西ノ谷」の利水とみられる田は 7 筆で、1反を超える田もあるが荒地が多く、水量の供給は十分ではなかったようだ。一方、中心集落の大津本村を流れる「大谷」は水量豊富で、谷からの利水とみられる田は 16 筆が確認できる。「脇ノ川」からの利水とみられる田は 4 筆でこちらも荒地が多い。脇ノ川に流れ込む小谷「入道ケ谷」「神ノ谷」も確認できる。全体に以前の検地から新たに登録された土地「出分」が多く、戦国期には一定土地開発が進んだことが推測できる。畑地は 12 筆、草地と見られる芝地は 7 筆、焼畑は 1 筆で、豊富な山地の開発も進んでいたようである。

耕地把握が主目的の『地検帳』からは、戦国末期の大津には漁村としての性格を確認することはできない。「浦」と呼ばれた近隣の集落に見られる海運に関わる「水主」や塩生産に関わる「塩浜」の記載もない。慶長 2 年（1597）に長宗我部氏が整備した行政機構が記された『秦政事記』には大津の地名記載はなく、「庄屋」が置かれた貝ノ川や足摺などの農村（郷）、浦を治める「刀禰」が置かれた川口や清水などの漁村（浦）に比べて、未だ卓越していない海辺の小集落であったことが分かる[4)]。

（2）江戸期の大津―災害とカツオ漁―

山内氏が土佐藩主として支配した江戸期には、藩の直轄地であった大津の漁村としての発展が明確に確認できる。天和 3 年（1683）には、東隣の漁村・貝ノ川と粟津（大津）の合計で水主 31、船 9 が所属していたことが藩によって把握されている[5)]。元禄年間（1688～1704 年）の藩の記録では、『地検帳』以前の土地（本田）は 61 石余、『地検帳』以後に開発された土地（新田）は 2 石余で、耕地の少ない大津では江戸前期の土地開発は限定的であったことが確認できる[6)]。宝永年間（1704-1711）には、大津村 24 戸と大津浦 20 戸余（漁船有）で、平地部（郷）と海辺部（浦）を合わせて 44 戸余りの戸数があり[7)]、集落としては戦国末期の 7 戸から大きく発展している。

海辺の大津は、前近代にも災害の常襲地でもあった。宝永 4 年（1707）の大地震・津波では多くの近隣漁村ともに「亡所、潮ハ山迄」とあるように集落が消失したことが書かれている[8)]。津波から 37 年後の寛保 2 年（1742）の藩の記録では、家数 43、人数 231、馬 9、船 13 とあり、集落が津波以前の規模まで復興していることが分かる[9)]。宝暦 7 年（1757）には台風に伴う洪水で再び「某所」となり、漁船 5 隻とともに魚などを運搬する「いさば船」2 隻も流されたことが記されている[10)]。奥地に深い山を抱え、狭い谷川に面した集落は、水害の危険もはらんでいた。また、弘化 3 年（1846）にも、台風の暴風で 24 戸の家が潰れたとの記録がある[11)]。

江戸後期の資料からは、漁村・大津の実態も見えてくる。享和元年（1801）の記録では、家数 39、人数 191、馬 5、鉄砲 2、留山 7、漁船 3（エデ取網・小船共 3 添）、小船 1、立網 1、「漁事松魚少々ツヽ釣り申候」とある[12)]。「松魚」はカツオのことであり、この時期の清水ではカツオ節生産が各浦々で盛んに行われた。船数は寛保 2 年の 13 隻に比べて少ないが、カツオ釣漁や立網漁が行われている状況が確認できる。留山は藩の直轄林で山地を植林して管理している状況も伺える。またこの時期の新田は 26 石余に増えており、徐々に耕地開発も進んでいた。貝ノ川・定福寺の過去帳からは、安永年間（1772～1780）に「大津新

屋」の屋号、幕末・明治初期には「大津中屋」が確認でき、廻船などを担う商人が大津でも 18 世紀後半以降に生まれているが、カツオ漁場から遠かったことで商人の台頭が遅れたことが指摘されている[13]。災害や不漁等の影響で浮き沈みの激しかった漁業だが、耕地開発は幕末にかけて急速に進んだようで、明治 3 年（1870）には新田は 172 石余に達している[14]。昭和 22 年（1947）の米軍撮影の航空写真（写真 2）[15] でも、山奥まで棚田や段畑が広がる景観が確認でき、近代の景観の原形がこの時期にできたことが推測される。

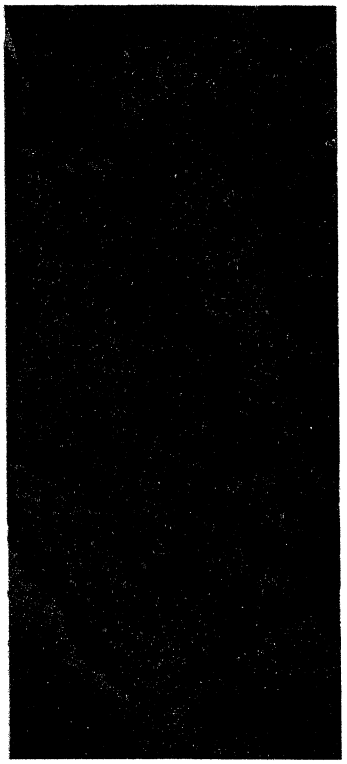


写真 2　1947 年の大津

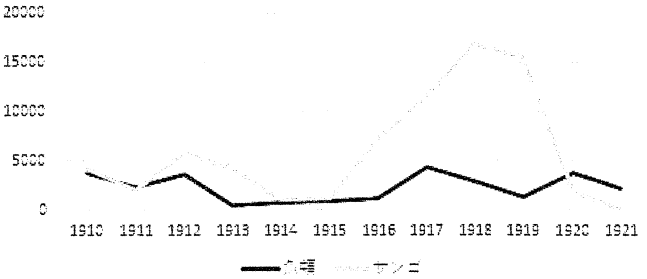
（3）明治・大正・昭和期の大津―サンゴ漁の活況―

明治～戦前には、清水の各浦が漁業権を得て、カツオ漁のほかカマスやアジ、エビ、磯魚、アワビ、トコブシなどの漁を行った。貝ノ川（明治 34 年～）などではブリ大敷でかなりの利益を上げるようになっていたが、大津では大敷網は確認できない。明治 30 年代以降サンゴ漁が活況になり、大津でもカツオ漁に加えて盛んに行われるようになった。明治 43 年～大正 10 年（1910～1921）の大津港の魚類とサンゴの水揚高の変遷[16]を見ると、サンゴ漁の比重の大きさが分かる（表 1）。この時期にイタリアのサンゴ商人が大津を訪れるなど、船元はかなり資本を蓄えていたようで、「オトコシ」と呼ばれる出稼ぎ人が室戸や清水の下ノ加江などから来て、ほとんどの家で雇われており、漁のない日は家の雑用を手伝った。また、オトコシが寝泊まりする「あたらし屋」という木賃宿もあったという[17]。サンゴ漁は大正 9 年（1920）を境に急速に衰退している。

昭和 5 年（1930）の大津は 125 戸 546 人、うち漁協の組合員 101 人とほとんどが漁業に従事していた。昭和初期の大津港の漁獲高は 2000～4000 円代で推移。動力船の導入も進み（和船 9、動力船 2）、副業としてはカツオ節加工が主体だった。和船によるカツオ漁は衰退し、長崎のタイ網漁船や室戸のマグロ延縄漁船などへ出稼ぎで乗る者も増えた[18]。近隣の下川口港が積み出し港になっていた木炭の生産も盛んで昭和 8 年（1933）には 21 の炭窯があり、16 人が専業、5 人が副業で従事し 25 俵を生産していたという[19]。

戦後の大津については、合併による漁協の再編などがあり、集落単位でのミクロな把握が難しくなる。明治 22 年（1889）に 6 村合併で下川口村となり、昭和 25 年（1950）には下川口町に。昭和 29 年（1954）には 4 町村合併で土佐清水市となっている。昭和 21 年（1946）には叶崎横道山 15 町を開墾が行われている[20]。漁業は立網と小型定置網が主流となり、伊

表 1　大津港のサンゴの年別水揚高（単位円）



勢エビ漁も盛んで[21]、貝類も多く取れたようである。大津港は昭和25年（1950）、28年（1953）の台風被害で土砂堆積の被害が出て、防波堤や河川導流路の整備などが行われた。昭和43年（1968）には8隻の船があり、組合員は118人。この頃大津港のさらなる改良工事や道路改良も進められた[22]。漁業は昭和40年代以降徐々に衰退し、昭和末期には釣り場として売り出しを行っている。

（4）小結

中世に小規模な海辺集落に過ぎなかった大津は、カツオ漁を主体としながらカツオ節加工を行う地先沿岸型の漁業を長く続けてきた。中でも、動力船の導入とサンゴ漁の活況は漁村・大津の漁業を変革させるものとなった。その一方で、背後の山地の耕地や山林の開発も段階的に進められ、農林漁業が一体となった暮らしが続いてきた。また、その歴史は風雨や洪水、津波などの災害との戦いでもあった。既存の歴史資料は統計的なものや地誌類が主体で、人々の生活実態を知るには限界があるが、災害や漁業の進展が漁村・大津を歴史的に読み解く重要な視点となることは明らかになったのではないか。

3、学校日誌に見る近代大津の災害史－教員は何を記録したか－

前章で明らかになった視点を基に、明治以降集落の中心となった大津小に勤務する教員が学校日誌に記録した大津の災害の実態を読み解く。これらの記録から災害に対する教訓を学ぶ。さらに災害記録としての学校日誌の性格やその有効性についても考えてみたい。

大津小資料の「学校防災台帳」[23]（1983年、写真3）で、大津小が災害の危険地域区分で「台風常襲地帯」に指定されているように、大津集落は前近代以来何度も台風被害を受けてきた。本章では風雨災害を中心に特記すべき災害をピックアップして、学校日誌に記された具体的な被害の状況とその記録の意義を見ていく。

■風害ノ為休校ス

日誌中で最も古い台風の記録は、明治25年（1892）に「風害ノ為メ休校ス」（9月11・12日）、「校舎修繕ニ付十二月四日迄休校ス」（9月13日）である。台風の風による校舎被害が甚大だったようで修繕に約3カ月を要している。一時的な休校にとどまらず、学校修繕をしながら授業も継続された。この台風は紀伊水道から大阪方面に抜けたもので、県東部の洪水被害などの記録は散見される。しかし、県西部の被害記録は皆無に等しく、既刊の『土佐清水市史』[24]にもこの台風被害に関する言及はない。ここで紹介した被害記録によって、初めて土佐清水市内の被害を確認でき、若干ではあるが被害による影響も示すことができた。

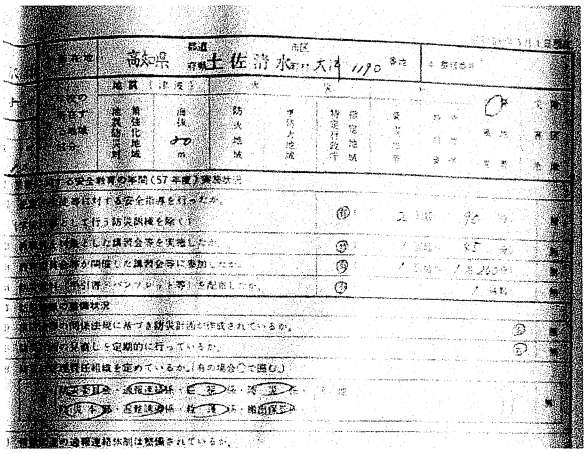


写真3　学校防災台帳

■部落ヨリ出役ヲナシテ体操場修繕ス

また、明治35年（1902）には「激浪ニテ倒家二軒■■二軒破損四軒・他ニ納屋倒四軒破

損船五十艘堤防二十間破損」（9 月 7 日、■は文字が重なり判読困難）と具体的な被害の状況が記載されている。激浪とは高波であろうか、家屋は倒壊し、船 50 艘や堤防が破損している。学校の被害は、「部落ヨリ出役ヲナシテ体操場修繕ス」（10 月 20 日）とあるように、地域住民が出動して風雨で傷んだ運動場を修繕している。この災害記録で明らかなように、学校日誌からは学校の被害だけではなく、地域の被害状況をも読み取ることができるのである。

■臭水旧校舎ノ土間ヲ突キ

大正 2 年（1913）7 月 18 日には「朝ヨリ降リ続キ午後益々大雨トナリ日暮ヨリハ其勢ノ勢愈々激甚トナリ大水川ニ溢レテ東西ノ石崖約二間余ヲ崩潰シ」「臭水旧校舎ノ土間ヲ突キ」「流下セル岩石川ノ両側ヲ突キ当ル音響（中略）太鼓ヲタタクガ如ク四面荒マシキ雨水ノ響耳ヲツンザカントシ終夜寝ニ就カズ」と実況中継さながらの記載が見える（写真４）。翌 19 日になると被害状況が確認され、2 軒で家屋や家具、馬などが流出、田畑の被害も甚大であったことが記されている。

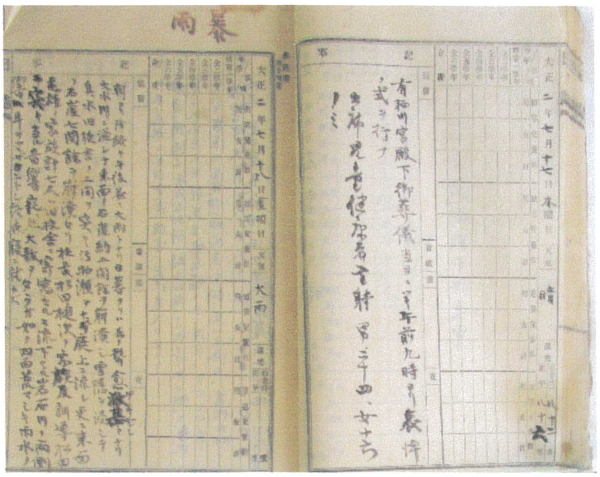


写真４　大正２年の学校日誌

この水害については既刊の『土佐清水市史』[25] をはじめ、他の災害文献においてもこれまで一切言及されていない。学校日誌から大津地域を襲った未知の災害情報を発見することができ、なおかつ地域の被害状況を示せた。

■頻発する災害と日誌の記録

昭和 9 年（1934）の室戸台風の際の日誌には「昨夜未の風雨波激しく大津部落の附近　道路に数十間に亙り崩壊さる」（9 月 21 日）と記され、昭和 14 年（1939）の台風の際の日誌には「終日豪雨降り続く」「暴風雨　小才角へヒナンせんとして難破　清水発動船難破　乗組員二名行衛不明」（10 月 16 日）と被害状況が記されている。また、昭和 26 年（1951）7 月には台風により校舎が倒壊、新築された昭和 28 年（1953）にも「台風 12 号来襲　旧校舎半壊」（9 月 14 日）など被害が続いている。

他にも大正 12 年（1923）の「羊歯浦トンネル大崩壊」（11 月 18 日）、昭和 14 年（1939）の「貝ノ川大津間大崩壊(三ヶ所) 自動車通行杜絶」「貝ノ川通学生は山道を通行する様各家庭に通牒」などの道路崩壊は土砂災害によるものと推測される。

昭和 21 年（1946）の昭和南海地震の際の日誌には、「大地震　藤原先生尊父令弟圧死　臨時休業」（12 月 21 日）とあり、教員が父と弟を家屋倒壊と見られる圧死で同時に亡くしている。当時の清水警察署の被害集計 [26] によれば、この地震における土佐清水市内の死者は 7 名である。この集計はあくまで統計的な数値であり、この 7 名が「誰で」「いつ」「どこで」「どのような状況で」亡くなったのかはこれまで明らかになっていなかった。日誌を読み解くことで、統計的な数値でしか分からなかった死者の死亡状況も若干ではあるが明らかに

できた。なお幕末以降津波による被害は発生していない。

■小結

太平洋に面した大津は「暴風」「洪水」「高波」「豪雨」「土砂災害」「地震」など多様な災害に見舞われ、集落の中心に位置する学校も度々被災してきた。大津小の校舎はたびたび破損・倒壊し、修繕を繰り返している様子が確認できる。日誌には学校だけではなく、地域の詳細な被災状況も記され、災害の脅威を伝える貴重な記録となっていた。日々連綿と書き続けられた日誌という特性上、これまで知られていなかった災害による地域の被災情報をいくつか明らかにすることができた。

近現代に発生した災害による被災情報は、公的な統計資料や新聞、個人の日記などに拠るところが大きいが、地域と密接に関係してきた学校に残る日誌も地域の被災状況を解明する重要資料として、今後より一層の検討が必要なのではないだろうか。

4、おわりに

本研究では、まず既存の文献資料によってマクロに大津の集落史や歴史的特徴をあぶり出した。大津は、地理的に災害の常襲地帯であり、度々風水害や地震津波に阻まれながらも、耕地開発や漁業を進展させながら復興し、集落規模を拡大させてきた。また、江戸後期の廻船などの商業資本の台頭や明治後期から大正期のサンゴ漁で活況は、地先沿岸型の小漁村から近代の漁港へ大津が発展していく礎となった。

また、災害についても被害軒数だけではない現地の被災状況や事後対応の事例をいくつも抽出できた。その中には、『土佐清水市史』等に記録のない事例も含まれていた。学校日誌は、主に校長や教頭が記述する学校の日々の公式記録であるが、自治体の文書管理規定ではおおむね3～5年で廃棄対象となることから[27]、全国的にも残存の非常に少ない歴史資料である[28]。

その中で、土佐清水市は大津小90冊（明治25年度～昭和62年度）を筆頭に、中浜小81冊（明治28年度～平成元年度、欠年度あり）、足摺岬小107冊（明治33年度～平成20年度、欠年度あり）、下川口小81冊（明治28年度～平成12年度、欠年度あり）、益野小65冊（昭和5年度～平成15年度、欠年度あり）、窪津小18冊（昭和10年度～昭和47年度、欠年度あり）と6校442冊の残存が確認されている[29]。土佐清水市は、全国的に見ても学校日誌の残存率が非常に高い地域であり、大津小・中浜小・足摺岬小といった明治・大正期の日誌が連続して残存している点は注目される。中でも大津小は明治25年度～昭和62年度の学校日誌が欠損なく連続して残存している稀有な事例である。

今回抽出した災害に関する記述は、学校日誌の記載のごく一部ではあるが、資料の量的側面から幅広い時代の事例を抽出でき、多角的な分析が可能であることを示せたのではないかと思う。また、大津小の学校日誌は詳細な記載に特徴があり、教員が見た地域の災害をつぶさに記録している。これは海岸線に近く、隣を河川が流れる災害被災リスクの高い立地に学校があったというだけでなく、地域の中心拠点であった学校に地域の災害の情報が集まりやすかったことも考えられる。これら災害の詳細な記載は、災害碑などと並んで、防災の教訓災害として後世に引き継ぐべき地域の記憶であり、今後の活用が期待される。

学校日誌という歴史資料は、行政の公文書や自治体史等には収録されない地域情報を含んだ地域資料としての性格を持ち、地域の生活誌解明に有益な資料である。今回分析の対象にはできなかったが、災害後の校舎や体育館、運動場の補修・修復などの記載もあり、災害復興という視点でも今後分析を広げることができるだろう。

活動の成果概要は、高知県の学校資料を考える会の会員である楠瀬慶太・髙木翔太・水松啓太・目良裕昭が分担執筆した。

【註】

1)『高知新聞』2020年4月11日夕刊

2)「土佐清水市旧大津小学校の資料救済と調査」『こうちミュージアムネット通信』vol.18

3)『日本歴史地名体系　高知県の地名』『土佐清水市史』、高知地域資料保存ネットワーク編2023『土佐国幡多郡大津村・上岡文書目録』地域資料叢書25なども参考に整理した。

4) 大正8年に書かれた『補注幡南採古録』も大津集落について同様の見解を記している。

5)『史林拾葉五・秘書巻二・天和二年改　浦々水主緒船表』

6)『元禄地払帳』

7)『土佐州郡志』

8)『南路志』巻七十二

9)『寛保郷帳』

10)『西浦廻見日記』(安永7年) は「大津、宝暦丑の大浪にいたミ、同寅の大洪水に浜辺の人家一宇も残らず流失して亡所となれり、こゝハ人ハ都而郷支配にて漁業迄浦支配なり、此所谷川海へながれ入所にて、口をまげれバ彼洪水ニ屋床流れ捨て（中略）漁船壱艘あれど水出れバ舟引場へ行ことならず、舟くるめがたし、川の流を東の長崎の方山根へはねさせて普請してよけん、今一ハ東のかた山のたハミを掘切て川口を東の谷川へ一に落してよけん、されど東の川三尺斗高きよし、其積りも有しよしにきこゆ、いかゞあらん、今の儘ならバ次第に亡所と成べし、昔ハ大津に舟五艘いさば弐艘有、にぎにぎしき事也しとぞ、今も郷分家居はよろし」と記している。

11)「風雨潰家之者御補被仰付御廻見向へ罷出寄村之事」『憲章簿』

12)『西郡廻見日記』。「浦人家無之」と記述があり、これも台風被害の影響であろう。

13)『土佐清水市史　上巻』

14)『郷村高帳』

15) USA-M274-85（国土地理院提供）

16)『下川口村誌』

17)『郷土大津部落の実態』

18)『昭和5年高知県漁業経済調査』

19)『下川口村誌』

20)『高知新聞』1946年9月17日朝刊

21)『高知新聞』1982年4月20日朝刊

22)『高知新聞』1968年7月4日朝刊、1968年8月2日朝刊

[23] 大津小資料 32－1

[24]『土佐清水市史　下巻』

[25]『土佐清水市史　下巻』

[26]『土佐清水市史　下巻』

[27] 目良裕昭 2019「高知県の公立小中学校における文書管理の現状」『シンポジウム「高知県の学校資料を考える」記録集』高知県の学校資料を考える会

[28] 宮城学院女子大学の大平聡氏によると、宮城県全域の小学校の学校日誌の残存は明治期では 10 件、大正期では 30 件に満たないのに対し、昭和期（戦前）は 120 件を超える。明治・大正期・昭和期とも、連続して日誌が残っている事例は非常に少ない。

[29]「高知県の学校資料を考える会」が実施した 2022 年度の土佐清水市史編纂事業の悉皆調査の成果。

【参考文献】

楠瀬慶太 2021「特集：資料レスキュー　土佐清水市旧大津小学校の資料調査と救済」『こうちミュージアムネットワーク通信』vol.18

楠瀬慶太・目良裕昭・渡部淳・髙木翔太 2021「学校資料による地域史復元―土佐清水市旧大津小学校資料の調査より」『よど』22

高知県の学校資料を考える会編 2020『シンポジウム「高知県の学校資料を考える」記録集』

高知県の学校資料を考える会編 2021『学校資料を残す・伝える－小中学校・高校に残る地域資料の世界－』

地方史研究協議会編 2019『学校資料の未来―地域資料としての活用と保存―』岩田書院

目良裕昭 2022「学校資料の救済と調査保存活動を支援する」『全史料協会報』111 号

目良裕昭・楠瀬慶太 2020「動向「高知県の学校資料を考える会」の発足と活動」『地方史研究』405

望月良親 2019「土佐国の浦に伝わる近世文書の整理―幡多郡大津村上岡家文書―」『高知の歴史資料を残す・伝える』高知戦争資料ネット保存ネットワーク